
真・恋姫†無双～継承された外史～

貴族

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜継承された外史〜

【Nコード】

N0404V

【作者名】

貴族

【あらすじ】

外史が終端を迎える…

それは…一つの物語の終りを意味する

だが…外史そのものが終わる訳ではない

外史は…新たな物語として再び突端を開く

それが…どんな形であれ…

『さあ……始めようじゃないか!!』

プロローグ

今から三年前の出来事だ

強い雨の日だった

その日、僕は家族を失った

同時に、……を得た

「君……一人なの？」

僕がうずくまって泣いていたら、女の人が声をかけてきた

綺麗な桃色の髪に、褐色の肌

扇情的な服装は、雨に濡れて更にその魅力を増していた

普通の状態なら見惚れていただろう

けど…

「お父さんとお母さんは……？」

両親について尋ねられた

「……」

僕は傍らに寝かされている物言わぬ死体を指差す

「……………そう…。ごめんね…助けられなくて…」

この人に謝られる理由など無かった

「ねえ…？ 君はこれからどうするの？」

どうすると言われても、答えに困る

帰る家も無ければ、両親も居ない

僕には、何も無かった

「……………行く当てが無いなら…一緒に来る？」

その人は、優しく微笑みかけて誘ってくれた

断る理由はなかった

これが…僕と雪蓮さんの出会いだ

《孫策の館》

「????side」

.....

..... 夢を見ていた

あの日の夢を...

忌まわしい記憶...

確かに、僕はあの日、雪蓮さんと出会った

だけど...あの日、僕は...

「寝汗が酷い.....」

駄目だな.....いつまでも引きずっていたら

もう終わった事なんだ

今さらどうしようもないんだ

今は感傷に浸るよりも、この先の事を考えよう

..... そっいえば...雪蓮さんと今日のお昼ご飯を一緒に食べる約束をしたような

……もう昼前じゃないか…！

ま…まずい……

もし、待ち合わせに遅れたら……

「ガクブル…」

僕は太急ぎで寝巻きから着替え、部屋から飛び出る

待ち合わせ場所である館の玄関を目指す

ここから何気に距離がある

僕が急いで廊下を進んでいると…

「あら〜？ 凌統くんじゃないですか〜？」

「穩さん!？」

この人は穩さん

いつも露出の多い服で、豊かな肉体を惜し気もなく見せ付けてくる

…あと、いつもボケボケで何を考えているのか解らない人だ

「何だか急いでいるみたいですけど…：どうかしましたか？」

「いや…ちょっと雪蓮さんとの待ち合わせに遅れそうで…」

「成る程。そういえば、何かぴりぴりしてましたね。」

……本格的にヤバイ

「穩さん！ これで失礼します！」

「頑張つてね」

僕は走り出す

それはもうハヤテのごとく走り出す

……廊下を

誰かに注意されかねない愚行だが…時間が無いから仕方ない

見付からないように素早く移動しよう

特に、冥琳さん辺りにでも見付かろうものなら…

「公績！ 廊下を走るな！！」

「はいすいませんごめんなさい申し訳ありません許して下さい殴らないで冥琳さん！！」

案の定、冥琳さんに注意されたので条件反射で謝り倒す

「いや……そんなに謝られても困るのだが……」

「じゃっ！　そういう事で！」

困惑する冥琳さんを尻目に僕は再び走り出す

「ちょっと待て！　まだ話しは……だから、廊下を走るな！」

「ごめんなさいいいいいい！！！」

「謝るんなら走るな！」

冥琳さん本当にすいません！！

でも、急がないといけないんです！

僕は更に速度を上げ、待ち合わせ場所へ向かう

「遅れました雪蓮さん！！！」

待ち合わせ場所には頬を膨らませ、不機嫌そうな雪蓮さんの姿があった

「遅いわよ長門^{ながと}！」

長門とは僕の真名だ

くれぐれも発音には気をつけてほしい

長門有希の長門じゃないよ

戦艦長門の長門と同じ発音だから

「ほんとすいません！」

僕は平謝りするしか無い

「罰として、頬っぺたむにむにの刑！」

なんですか、その果てしなく思い付きな名前は！？

「っへ！ やめへくらはいよ！」

「あら、以外と柔肌……女の子みたい」

何を言っているんですか……

「まあ、これぐらいで勘弁してあげる」

「うう……雪蓮さんに虐められた……」

「人聞きの悪い事言わないでよ！」

……うう……微妙に頬がひりひりする……

まあ……これで雪蓮さんの気が済むなら……

「とりあえず……行こ！ 長門！」

相変わらず……人を引き付けて離さない、素晴らしい笑顔だ……

僕は…そんな貴女に…

「行きますか！」

その後

「今日は長門の奢りね！」

「えっ！？」

財布が空になりました

プロローグ（後書き）

お待たせしました。

とりあえず、プロローグだけでも

次回以降はまたしばらくお待ち下さい

第一話　恋慕

僕は朝起きて、朝ご飯を食べる前に軽く訓練をする。

先日は寝坊をしてしまったが、基本的に毎日やっている。

所謂日課というやつだ、

日々の積み重ねが、大事なのだと思い、始めた事だ。

「百九十八……百九十九……二百！！　よし、こんな所かな」

訓練を終え、汗を拭う

「うーむ……いつそ水浴びでもするか……」

そう思い、僕は井戸に足を運ぶ

その途中、祭さんにばったり出会った

「祭さん！　おはようございます！」

挨拶をする

年上……目上の方には当然の礼儀だ

「おお、長門か。うむ、今日も精が出るな！」

「祭さんは今日も元気そうですね。」

確か、昨日も夜遅くまで雪蓮さんとお酒を呑んでいた筈だ

「当たり前じゃろ！」

断言しているが…その根拠は何処から出ているのか？

祭さんと別れ、井戸に来た

早朝なので誰も居ない

上半身を脱いで、濡らした手ぬぐいを使って身体を拭く

「なぐがとっ！」

「にゃああー！」

後ろから誰かに抱き着かれる

非常に柔らかい感触がする…しかし…

マズイ……

振り向くと抱き着いて来たのは雪蓮さんだと解った

「…雪蓮さんですか……驚かさ無いで下さいよ……」

……うん…見られてない……

「良いじゃない別に！ それにしても…白くて綺麗な肌ねえ…ま
るで女の子みたい」

何言っているんですか…

「ところで長門！」

急に真剣な表情になる雪蓮さん

「な…何ですか？」

「冥琳に何を聴かれても『知らない』って答えてね！」

「？」

いきなり何を…

「じゃっ！ よろしくね」

……雪蓮さんも元気だな

二日酔いとかしないのかな？

「ふう…冷たいけど気持ち良かったな」

僕は水浴びを終え、朝食を食べる為に食堂へと向かう

「長門くんオハヨ」

「おはようございます、穩さん。」

食堂では穩さんが朝食を食べていた。

挨拶を済ませ席に座ると…

「長門!!」

眉間にシワを寄せた冥琳さんが凄まじい勢いで飛んできた

「冥琳さん…!」

「雪蓮を見なかったか!？」

……何をやったんだ雪蓮さん…

冥琳さんがこんなに怒っているの久しぶりに見た……

「…知りません」

「本当か？」

物凄い形相で睨まれる

「……何処かに逃げました」

ごめんなさい雪蓮さん……

「よし、捜しに行くぞ。手伝え!」

「いや…僕まだ朝食…」

「手伝え」

「頑張らせて頂きます!！」

………恐い……

《街》

さて………とりあえず街まで来てみたが……

雪蓮さんはいるのだろうか？

大体…冥琳さんは強引なんだよ……

雪蓮さんが何をやったのかは知らないけど……怒りすぎだ

ともかく、見付けないと朝ご飯が食べられない……

………雪蓮さんが行きそうな所……か

闇雲に捜しても見付かるとは思えない

「あら？ 長門じゃないの？」

居たよ！

もう見付けちゃったよ！

「雪蓮さん！ 冥琳さんが捜してますよ！」

「適当にごまかしといて」

必死な僕に対して雪蓮さんはどこ吹く風

正直腹立つ

「何を言っているんですか！？ 雪蓮さんのせいで僕は朝食すら食べさせてもらえてないんですよ！」

「なら、今から食べに行く？」

「……………」

この人は……

結局、雪蓮さんの誘いで朝食を食べに食堂へ向かう事になった

「ほら、もっと食べなさいよ」

「いただきます」

雪蓮さんに勧められ、朝食に手をつける

「それで…雪蓮さんは何をやったんですか？」

「何が？」

「ふざけないで下さい。怒りますよ」

「はいはい……さて、何から話したものかしらね」

…そんな複雑な事をやったのだろうか？

「昨日、冥琳から書類仕事を頼まれたんだけど……疲れてたから今日の朝やるって言ったのよ」

「で……結局逃げたと」

「だって、あれは別に私が絶対にやらないといけない仕事じゃないし……」

……はあゝ

「そついう問題じゃないでしょうっ」

呆れて何も言えないよ……

「ぶうゝ……」

口を尖らせ、拗ねる雪蓮さん

「っー!!」

か……可愛い……

普段は体つきも言動も大人びているけど…時々、少女のように可愛いらしい仕種を見せてくれる

僕はそんな雪蓮さんが好きだ

……けど…僕は…

「ともかく…僕も一緒に冥琳さんに謝りますし、仕事も手伝いますから…」

「解ったわよう…」

ああー！ もお！ 可愛いなあ！ こんちくしょー！

僕達は館に戻る為に店を出ようとした。その時だった…

「全員動くなあー！」

何だ！？

「こっちに来い！」

突然、武装した男の三人組が店内に押し入り、客の一人を人質にとった

「糞っ！ 兄貴！ 店の外は囲まれてますぜ！」

「仕方ねえ！ ここに立て籠もってやり過ぐす！」

賊！？

どうしてこんな街中に！？

「（雪蓮さん！）」

僕は小声で雪蓮さんに呼び掛けた

「（長門…私が合図したら、あの男達を抑えて。人質は私が何とかするから…）」

「（解りました…）」

……さて…

賊は三人…髭の男に小柄の男と大男……動きは素人そのものだ

だが、人質を一人取られている以上、無理は出来ない

…汚い手を使う……だから賊は嫌いなんだ…

「下衆が……死に腐れ…」

「（長門！？）」

「おい、お前！ 今何て言った！」

「死ねって言ったんだよ…」

「雪蓮 side」

「死ねって言ったんだよ…」

……忘れてた…

長門は、賊の類を酷く嫌っている

理由は明白……三年前のあの日が原因だ…

ともかく…今の長門は冷静さを欠いている

けど…

「構わねえ。やっちまえ!」

「抵抗するなよ…」

「えっ?」

小柄の男が長門に切り掛かったが…一瞬のうちに地面にたたき付けられた

「次……そのデカイ奴…」

こうなった長門はもう止められない

「ぬわああ!」

「二人目…」

……強い

「動くな！ こっちには人質が…！」

「遅い…」

「ぐわああ！」

あっという間に制圧……

速い…

「長門 side」

……

「長門…」

やってしまった…

「雪蓮さん、終わりました…」

「……そうね」

……何も言わないのか…

「じゃあ、帰ろっか。」

「はい……」

第二話　〜 匪賊 〜

最近、各地で黄色い布を身につけた賊の集団が暴れ回っている

そいつらは黄巾党と呼ばれている

……屑が……

胸糞悪い奴らだよ……

で、その黄巾党の駆逐の為に、各地の有力諸侯に討伐命令が出ている

残念ながら、雪蓮さんには直接は来ていない

雪蓮さんの母上、孫文台様の世代の時はかなりの力を持っていたらしいが……現在は袁術の客将に甘んじている

そして先日、その袁術から城に召喚命令が降った

さて、さっき冥琳さんに呼ばれてこれから軍議な訳ですが……

「来たか、長門。」

軍議を開く場所が普通より少し可笑的なんだ

「雪蓮さんは……もう出発したんですか？」

「そうだ。その間に我々は、軍議を済ませ、出撃の準備が出来次第出発する。」

通常、軍議とは何処かの一室であるものだが…僕達を取り巻く環境はなかなか厳しい

部屋で密談でもしようものなら、直ぐさま密偵が袁術に知らせを出すだろう

だからこそ、こうして堂々と中庭のど真ん中で軍議をしている

「さて、軍議に入ろうか。出陣に関して、問題が三つある。」

問題……

「兵糧、軍資金、そして兵数だ。」

…どれも軍を動かすには欠かせないものだ

「まず最初に兵数の問題だが……」

「敵の数は？」

祭さんがたずね、穩さんが答える

「現在、荊州で暴れている黄巾党は、北と南の二部隊です。北が本隊。南は分隊。」

普通なら、数の多い本隊は袁術が担当すべき…でも…

「……袁術さんなら確実に私達を北の本隊に当てるでしょうね」

「つまり…兵数は多い方が良いという事ですよね」

「まあ、そうなのだが……集められても五千、無理をすれば一万くらいと言った所か」

「少ないですね……それだけで黄巾党の本隊とやり合うのは勘弁したいです」

まあ…無理な話しなんだけど…

「……うーむ」

「……」

皆黙り込む

「兵数差は策で何とかするしかないな。兵法としては邪道だが、無い袖は振れん」

さすが冥琳さん！

頼もしい！

「では、次は軍資金の問題ですが…」

穩さんが話を進める

「金の事はわからん。」

僕もお金の事は良くわからない。ここは冥琳さんと穂さんに任せよう

「では、私が説明を…現在、館にある金子は多くない。武器や兵糧を揃えるためにも、軍資金を集めないといけないが……」

「街の有力者に協力を要請することは出来ませんが、それでも多くの資金は集まらないでしょうね」

「ふむ……となると…あれしか無いな…」

「あー…あれですか…」

……っ…まさか!?

「長門…」

来たよ!

「雪蓮は私が説得するから…頼む」

「……仕方ないですね…」

はあ…嫌だなあ…

「で…今回はどうしますか?」

「うむ、まあ金子だからな……食事くらいなら袁術も納得するだろう」

さて…“あれ”とは何か説明しよう

簡単に言えば、僕が袁術に貸し出されて代わりに金子等を報酬に貰うということ

何故かわからないけど僕は袁術に気に入られているらしい

冥琳さんが言うには『ほの字』らしいけど…誰が何に、そしてどういう意味かさっぱりわからない

後、袁術の所に行くと何故か雪蓮さんの機嫌が悪くなるんだよねあ…

だからあんまり行きたくないけど…非常時だから仕方ない

「まあ、農らの現状ではそれに賭けるしかないな……」

「そうですね。とりあえず、雪蓮に伝令……いや、私が直接行って説得せねばならんか…」

という事は…出撃の準備は僕達がするのか…

「出撃準備は…穩が仕切れ」

「はいはい」

ああ……こき使われる…

く数刻後く

《戦場》

さて…色々すっ飛ばして戦場に來た訳で…

「いよいよ戦乱の幕開けね。……ふふっ、ゾクゾクしてくるわ」

「……冥琳さん…雪蓮さんが恐いです…」

「気にするな。何時もの事だ。」

「どういう意味よ!? 別に四六時中血に飢えてるわけじゃ無いわよ!」

「「えー……」」

生暖かい目をむける僕と冥琳さん

「酷いわね……。ていうか、長門は賊が相手だと私より危なくなるじゃない」

「ソナコトナイデスヨー」

的を射た発言に思わず片言になってしまう…

「そっいえば…そうだったな…」

冥琳さんが後ずさる

「いやいや! あからさまに引かないで!」

「……はあ…。儼らの軍にはまともな奴がおらんのか…」

……反論出来ない……

「ま、まあ…とりあえず戦法の確認をしましょう!」

穩さんが珍しく話を進めてくれた

「そうだな。なら、突然だが…長門に問題だ」

本当に突然ですね冥琳さん…

「この戦いは呉の独立の第一歩だ。で、我々はどうすれば良い?」

そうだなあ……

まあ…勝つのは大前提として…

「圧倒的な勝利ですか?」

「うむ、正解だ。」

良かった…当たった…

「まあ…実力や結果が出てないと独立なんて出来ませんからね…」

「その通りだな。」

「あーはいはい。御託はいいから、さっさと黄巾党を皆殺しにするわよ」

「雪蓮さんは過激だなあ……まあ…僕も皆殺しには賛成なんだけど……」

「（やはり我々の軍には危ない奴しかいないのか…）」

第三話　蜂　蜜

《戦場》

「長門 side」

「炎が上がった……終わったのか……」

戦いは直ぐに幕を閉じた

黄巾党は数こそこちらを上回っていたものの、兵の練度や将の統率力ではこちらが勝っていた

敵はまともな抵抗が出来ぬまま、冥琳さんの火計で焼かれた

「うーん……あんまりする事無かったな……」

大体…雪蓮さんは総大将だったのに暴れすぎなんだよなあ…

「長門……!」

噂をすれば雪蓮さんが………うえっ!?

「ぐふえ!」

雪蓮さんが凄い勢いで抱き着いて来た

「は……落ち着く……」

雪蓮さんは僕の頭を掴むと、その豊満な胸に押し付けた

「く…苦し嬉しい…!!」

雪蓮さんは戦闘中、感情が高ぶって手がつけられなくなる。

それは戦闘終了後まで続き、時々暴れたりもしていた。

ある日、冥琳さんにその状態の雪蓮さんの相手を頼まれたのだが…
…何故か雪蓮さんが僕に触れると、落ち着きを取り戻す事がわかった。

その日以来、戦闘終了後に雪蓮さんに抱き着かれるようになった。

正直、悪い気がしない

むしろ嬉しいが、時々加減を間違えるのか、死にかけるから恐くもある。

「あゝあ……この後の事を考えると憂鬱だわ…」

雪蓮さんがぼやく

「この後？」

「そうよ…。この後、袁術の所に報告に行くんだけど、長門も連れてかなきゃならないのよね…」

何で僕も……そういや、金子の替わりに食事をする約束だったな…

「あゝ……ごめんなさい……」

「何で長門が謝るのよ？　むしろ、冥琳が謝るべきよ！　冥琳の提案なんでしょ？」

「そうですね……。でも、金子が無ければまともな戦闘が出来なかったんですから、仕方ないですよ。」

とりあえず、冥琳さんにとばっちりがいくのを防ぐ

「それも情けない話しよね……」

「……」

思わず黙る

「まあ、ここでこうしてる訳にもいかないし、とりあえず行こつか！」

「そうですね。」

僕と雪蓮さんは、袁術のもとに向かう

《袁術の城》

袁術の城では既に晚餐の準備が出来ていて、雪蓮さんの報告もそこに直ぐに食事となった

「うわははは！ 大儀であつたぞ、凌統！」

もう何度目かわからない相手を間違えた称賛の言葉

袁術は酔っていた

ハチミツを酒で割って飲んでいるようだ。そりゃ酔うわ…

そして、僕に近寄って身体を絡めて来るんだ気持ち悪い

「……………おほん！」

雪蓮さんが咳ばらいをする。これも何度目かわからない…

僕の隣に座っている雪蓮さんは明らかに機嫌が悪い

そして僕は居心地が悪い

「なんじゃ孫策！ うるさいぞ！」

僕にのしかかり、袁術は雪蓮さんに文句を言う

「ごめんなさい、ちよつ回りが酒臭くて」

皮肉たっぷりで言い返す雪蓮さん

「なの！ 飲み過ぎじゃ！」

「ええ！？ 私の所為ですか！？」

…酔っ払いには何を言っても意味が無いみたいだ

「つつゝゝ!!」

悔しそうに唇を噛み締める雪蓮さん

雪蓮さんには悪いけど、悔しがる雪蓮さんも可愛い

「もう知らない！」

やけくそになったのか、雪蓮さんが酒を一気に呷る

「雪蓮さん！ そんな一気に飲んだら……ぶべっ!？」

「こら、凌統！ よそ見をするな！」

袁術が僕の頭を掴んで自分の身体の方に向ける

そんな細い腕の何処にこんな力が…

「っ!!」

急に僕の身体に雪蓮さんがくっついて来た

「……雪蓮さん？」

「ながとゝゝ…えへ…」

完全に酔っ払っている…

興奮しているのか、酒の回りが早いみたいだ…

「ながと〜」

前門の虎（酔っ払い）！

「りょうとう〜」

後門の狼（酔っ払い）！

「……えーと……」

戸惑う獲物（素面）！

…なんだこの状況！？

「ながと〜…あーん！」

焼売を掴み、僕に差し出す雪蓮さん

「ぐぬぬ……りょうとう！ ハチミツじゃ！」

ハチミツをそのまま差し出される

どうする！？

どっちを先に取る！？

大好きな雪蓮さんの焼売から食べるか!?

ハチミツにして袁術の機嫌を取るか!?

……た…助けてめーりん!

…アホな事言っでないで真面目に考えよう…

………うーん…

………

………決めた!!

結論

焼売にハチミツをかけて食べる

「………もぐもぐ………」

「ちょっと長門!?! それはやめたほうが………」

僕の奇行によって雪蓮さんの酔いが醒めたようだ

「もぐもぐ……うつ！？」

「ほら……変な食べ方するから……」

「つますぎるー！！」

「え……」

「当然じゃ！ ハチミツは何にでも合うからの！」

「……えー……」

こうして、夜は更けるのだった

第四話く旧臣く

荊州で暴れていた黄巾党は、僕達の活躍によって撃退された。

しかし、それは局地的なもので、大勢に影響は無かった。

黄巾党は大陸全土に、その勢力を広げていった。

更に、黄巾党討伐を掲げ、動き出した官軍をも撃破した。

だが、腑抜けた官軍とは対照的に、各地の諸侯たちが目覚ましい活躍をしていた。

大きな勝利とは言えないが、小さな勝利も積み重なれば大きな意味を持つ。

そう、黄巾党はその勢いを失い、衰えを見せ始めていた。

そんな中、雪蓮さんに再び袁術から使者が尋ねてきた。

「お帰りなさい、雪蓮さん。」

「ただいま……」

「で、どんな用事だったんですか？ 雪蓮さん？」

あんまり良い事は無かったんだろうな…

「黄巾党の本隊を叩けだって。……無茶言ってくれるわよ、ホント」

え…？

「……本隊だと？」

冥琳さんが焦る

「面白い冗談ですよ……噂じゃ、大賢良師が率いている本隊の数は、二十万とか三十万らしいですよ……。そもそも桁から違います。」

「でも…あの馬鹿二人はそんなこと関係無いみたい」

……ああ…

「……まあ、馬鹿の事を考えても仕方あるまい……。それで、どうするんだ雪蓮？」

「とりあえず、みんなを呼び寄せてから考えるわ」

みんな？

「みんな？　という事は……旧臣を集める事に関して、袁術が許可を出したのか」

旧臣……話しは雪蓮さんから聞いていたけど…

「ええ。……馬鹿よね、ホント」

雪蓮さんが怪しげな笑みを浮かべる正直恐い

「その馬鹿さ加減は有り難い。…これで軍が増強できるというものだ。」

「ふむ……先を見据えて動くか。……時機が来るとお考えかな？」

「漢王朝の統治能力はもはや無いも同然よ。そこに都合良く起こった黄巾の乱。……その先には群雄割拠の時代がやって来るわ。」

……難しそうな話をしているけど……

端的に言えば、来たる戦乱に向けて昔の仲間を集めて戦力を増強するという事かな……

「では、直ぐに使者を出して、各地に散っている旧臣達を集めよう」

出陣は全ての準備が整ってからになるのかな……？

しかし……旧臣ね……

何か……緊張するな……どんな人達何だろ？

軍議から十日後、僕達は館を出発した。

目指すは冀州。

黄巾党本隊との決戦だ。

「穏、蓮華達はいつ合流するって？」

「兵を集めてから合流するらしく、少し時間が掛かるとのことでした。」

「ということは初戦は僕達だけという事ですな」

「連れてきた兵は多くないから、無茶は出来ないわね。」

雪蓮さんが少し残念そうに呟く

「敵本拠地の周辺ならば、斥候ぐらいはいるだろう。先ずはそういったら処理しよう。」

冥琳さんが提案する

「諸侯の軍も動いているみたいですからね。良い感じに敵がバラけてくれるかと。」

「ふむ。ならそれで決まりね」

雪蓮さんが決定し、方針が決まる

「了解です！」

「では、そろそろ軍を止めて昼にしようかの」

「やった！ さっきからすっごいお腹空いてたんだ！」

軍議中だから言い出せ無かったけど…

祭さんありがとう！

「わーい、お昼お昼っ」

さすがに穩さんみたいに行動には出さないけど…

さて、弁当を取りに行こうかな

「長門。」

雪蓮さんに呼び止められる

「私の分もお願いね。向こうで待ってるから。」

「はい、了解です！」

「……嫌な顔一つしないな」

「当たり前ですよ冥琳さん。長門くんは雪蓮さん命ですからね。」

？

冥琳さんと穩さんが何かこそ話してるみたいだけど……まあ良
いか！

で、二人分の弁当を取ってきたわけだけど…

雪蓮さんは何処だろう？

「長門！ こっちよ！」

あついたいた！

「どうぞ雪蓮さん。」

「ありがとう。」

青い空、白い雲、そして雪蓮さん…

質素な弁当がどんな高級料理よりも美味しく感じる

「美味しい？」

「はい！」

雪蓮さんと一緒に食べるから！

「所で、この後合流する中に私の妹もいるのよ」

「はい、聞いてます。孫権様ですよ。」

なんでも、冥琳さんが言うには次代の呉の後継者になる人だとか

「そう。でね、蓮華はちょっと真面目過ぎで堅物っぽいところがあったね。」

雪蓮さんとは正反対だなあ

「融通のきかない子だけど仲良くしてやってね」

「言われるまでも無いですよ」

しかし…生真面目な妹を心配する雪蓮さんか…

うん…

とりあえずさっさと弁当を食べてしまおう

第五話　突出

昼ご飯を食べ終えて直ぐ、偵察部隊が帰還した

「雪蓮さん、偵察部隊が前方に黄巾党の分隊を発見したみたいです。」

「来たわね…行くわよ長門！」

「え？　いや、雪蓮さん？」

まさか…

「前線部隊は私に続きなさい！　黄巾党を叩くわよ！」

やっぱりだ！

「雪蓮さんマズイですよ！　総大将が単独行動でしかも先方なんて！　まずは冥琳さんに…」

「何してるの！？　置いて行くわよ！」

ああ、もう！

雪蓮さん一人で出陣させる訳にはいかない！

とりあえず、冥琳さんには伝令を出して…

「待つて下さい雪蓮さん！」

雪蓮さん、前線部隊と共に黄巾党に向かって走りだす

雪蓮さんはこのまま正面から突撃するみたいだ

いくら黄巾党が相手だからといって、相変わらず無茶な事を…

ともかく、雪蓮さんが安心して暴れられるように背中を守ろう

敵に向かって走り出してから少したった時、冥琳さん達が追い付いてきた

「雪蓮！ 勝手に先行するな！」

怒鳴る冥琳さんに

「良いじゃない別に」

反省する気配の見えない雪蓮さん…

「そういう訳にいくか！ もし何かあったら…」

「大丈夫だって。黄巾党なんてすぐに蹴散らしてあげるから！」

そう言つて、更に走る速さを上げる雪蓮さん

「ああ、もう！ 長門、よく知らせてくれたな。お前はそのまま雪蓮に続け。」

「了解です！」

言われるまでもなくそうしたけど…

程なくして、前線部隊が敵と接触した。

得物を抜いて構える。

僕の得物は双剣だ。

「雪蓮さんは何処だ？」

辺りを見回す、どうやらかなり前に出ているようだ。

…仕方ない、冥琳さんに雪蓮さんのお守り……護衛を頼まれているんだ。前に出よう

「雪蓮さん！」

雪蓮さんを見付けた

予想通り、最前線で大暴れしていた。辺りには、敵の頭が転がっている。

その数を数えるのは気が引ける…。それより、これだけの数の敵を斬っているのに、雪蓮さんの得物は切れ味が落ちて無いようだ。

南海霸王が凄いのか、雪蓮さんが凄いのか…。

多分…両方かな

ともかく、雪蓮さんがこんな前線で戦うのはマズイ…

あまり意味は無いと思うけど、一応注意しようかな…

「雪蓮さん！ 前に出過ぎですよ！」

「長門く！ やつと来たわね！ さあ、行くわよ！」

やっぱりだよ…

仕方がない…

「わかりましたよ……後は僕が守ります、存分に暴れて下さい。」

「流石長門ね！ 頼りになるわ！」

頼りになる……

雪蓮さんが…僕に……

「（＊＾．＾＊）」

「どうしたの？」

「い、いえ！ 大丈夫です！」

…っう…顔が熱い…絶対赤くなってる…

…集中しないと！

「はああああああ！！」

雪蓮さんが雄叫びと共に剣を振る

すると、鮮血が飛び散り、敵の頭が転がる

……僕はもう見慣れたけど、雪蓮さんの戦い方は容赦が無い。

その後も、雪蓮さんは次々と敵を薙ぎ倒していく。

「やっぱり、雪蓮さんと一緒だとやる事が無いな……」

と……敵が逃げていく

呆気ない……

「追撃しますか、雪蓮さん？」

「これ以上勝手な事すると冥琳に怒られるわ。」

十分勝手な事をしてると思います……。というか、自覚あったんですね。

「さあ、戻るわよ」

「了解です」

兵をまとめ、他の部隊に合流する。

冥琳さん達と合流したが案の定、冥琳さんはかなり怒っていた。

「雪蓮！」

「うわっ、こわっ!？」

冥琳さん恐い……

というか…何で僕の背中に隠れるんですか雪蓮さん？

「総大将自ら先陣切って突撃するなど……もう少し自覚というものを……」

「ごめんなさい……」

さすがの雪蓮さんも冥琳さんには頭が上がらないな…

というか…なんで僕の頭を下げさせているんですか？

「はぁ…次からは私の指示に従ってもらうからな…」

「はぁーい!」

……絶対従わないな…

その後、軍を北に進めた。

雪蓮さんの妹の孫権さんと合流するためだ。

予定より早く合流地点に到着した。

「うーん……緊張するなあ……」

「どうかしたのか、長門？」

冥琳さんが心配そうに話しかけてきた。

「冥琳さん……。いや、少し緊張して……」

「緊張？ どうして？」

「その、僕は雪蓮さんに拾って貰った身で、新参者ですから……認めて貰えるかなとか……受け入れて貰えるかなとか……」

「そうか……。長門は真面目だな。余り考え過ぎるな。大丈夫だよ、長門なら。」

冥琳さんに言われると説得力があるなあ……

安心感がある……

「ありがとうございます。安心しました。」

「それは良かった。さあ、もうすぐ時間だ。」

「はい！」

第六話　諸候

「後方に砂塵…。どうやら、孫権さんが到着したみたいですね。」

隣に立っている冥琳さんに言った

「さすが蓮華様だ。蒼天中央に日輪が至る刻に…。…という合流時間をしっかり守ってくれているな」

誰かさんと違って…。と言いたげに雪蓮さんをちらりと見る

「…。そういう融通の効かなさが、心配なんだけど…」

いい加減な人よりマシかと…

失礼な事を考えながら、近付いてくる孫家の牙門旗を見つめる

迫って来ていた牙門旗がピタリと止まり、人影が近寄ってくる。

雪蓮さんと同じ桃色の綺麗な長髪。

一目で解る。この人が孫権さんだ。

雪蓮さんと同じくらい目のやり場に困る体つきと服装。

うう……。…また緊張してきた…

「お姉様！ 今、報告を聞きました！ 総大将が最前線に立つとは、
どういふつもりですかっ！」

「うわっ……」

雪蓮さんが呟く。ちょっと可愛い。

しかし、凄いい剣幕だなあ…。

「あなたは孫家の家長にして呉の指導者！ それがこんな…！」

くどくどと説教を続ける孫権さん。

そこら辺は冥琳さんに似ているな。

「うーん……確かに雪蓮さんの言っていた通り、融通が効かなさそうですね…」

「まあ、そういう側面もあるがな。だが……器で言えば、恐らく雪蓮より大きいだろう」

「そうなんですか？」

「英雄に相応しい器と能力を持っていらっしやる。あとは経験だけといったところだな。」

冥琳さんが答えてくれた。

「そうなんですかー。」

少し興味無さ気に言ってしまった。

「おっと、いらっしやったようだぞ。」

孫権さんが近付いて来る。明らかに僕に向かって歩いている。

「貴方が凌統ね…。」

足元から頭の先まで、品定めをしているのか、舐める用に僕を見ている。

「姉様と冥琳から色々と聞いているわ。孫家の為に良く働いてくれていると。」

「いえ、僕は当然の事を…。それに、僕なんか対した役には…」

「謙遜するな。これからも姉様をよろしく頼む。」

「は、はい！」

孫権さんが僕から離れると、代わりに冥琳さんが話しかけてきた。

「言っただろう？ 大丈夫だな。」

「はい！」

冥琳さんと話していると、孫権さんが二人の女性と共に、雪蓮さんに連れられて戻ってきた。

「雪蓮さん、そちらの二人は？」

何気なく言った僕の言葉に…

「そうか…。姉様達は真名も預けていたわね。」

孫権さんが反応した。

「私達も預けるわ。蓮華よ。よろしくね。」

孫権さん…蓮華さんが右手を差し出す。

差し出された手を握り答える

「長門です。よろしくお願いします。」

「ほら、二人も。」

蓮華さんが他の二人に促す。

「は、はい！ 姓は周、名は泰、字は幼平、真名は明命！ 長門くん、よろしくね！」

僕と歳が近そうだ。

「姓は凌、名は統、字は公績。よろしく、明命ちゃん！」

年上の人が多かったから嬉しい。

「…我が名は甘寧。字は興覇。真名は思春。」

最後の人は名乗っただけ、明らかに僕を警戒している。

いや、初対面だから仕方ないけどあからさまだからちょっと傷付く。

「思春！ もう少し愛想良く出来ないの？」

蓮華さんが注意してくれるが…

「無愛想なのは生れつきなので…。」

効果は無いみたいだ。

「あはは……。とりあえず、自己紹介はこれでおしまい。部隊を再編成して、すぐに出発するわよ。」

「はい！」

「はい！」

「はっ！」

雪蓮さんの指示に、それぞれ反応する。

人が増えたから、色々な返事が入り混じって少し面白い。

数刻後、僕達は黄巾党本隊の居る城の目の前まで来ていた。

城の周りには僕達以外にも諸候の軍勢が展開していた。

「曹、袁、公孫、それに劉と十？。ともかく、結構集まったわねえ」

「総数は十五万ぐらいですね。黄巾党は二十万と聞いていますが…」

不安げに呟くと、冥琳さんが教えてくれた

「問題無い。敵の大半は食い詰め農民やどこぞから流れてきた浮浪だ。対した事は無い。」

「成る程、でも敵は城に籠ったまま…、引きずり出すか城門を破る必要がありますね。」

「良く解っているな。穩、城の地図を持って来てくれ。」

穩さんが地図を持って来て、それを机の上に広げた。

「長門、この城の特徴は？」

「えーと…全軍を展開出来るのは正面だけ…左右は狭くて大軍で攻めるのは困難…後ろは絶壁。攻めづらく、守りやすい城です。」

「完璧だ。」

冥琳さんに褒められた。嬉しい。

「さて、この場合、我々が取るべき戦法だが…」

「めんどくさいから正面突破！」

「雪蓮の戯れ事は置いといて…」

「酷！」

雪蓮さんの作戦のほうが酷いです

「左右から死角を付き、部隊を潜ませ倉と兵舎に火を放つ。」

「つまり、その混乱に乗じてなだれ込むと！」

「そういう事だ」

「よし、作戦は決まったわね！ 決行は今晚、直ぐに準備に取り掛かって！」

「はい！」

第七話

深夜。

作戦が開始された。

僕は、やはり雪蓮さんの護衛で共に正面から敵の陽動担当だ。

「雪蓮さん、準備出来ました。何時でも行けます。」

「了解。……蓮華、行つて来るわね」

「はい。お気を付けて」

陽動には危険が伴う。当然の事だが、気をつけなくては…。

雪蓮さんに怪我をさせる訳にはいかない。……個人的にも。

「さあ、思春と明命が動き易いように、派手に引き付けるわよ!」

「いや、余り大袈裟にやると危険ですよ…。」

必要以上に引つ掻き回せば予想外の動きをされるかも…

「ええ…? まあ、良いわ。」

ちよつと拗ねる雪蓮さん。相変わらず可愛い。

「とりあえず、ドラを鳴らして挑発します。」

ドラを鳴らすと、城壁の篝火が動き回るのが確認出来た。

「出て来たわね。弓隊の一斉射の後に後ろに下がるわ。攻撃開始！」

弓隊が攻撃を開始する。

しかし、こちらの攻撃の三倍以上の矢が城壁から飛んで来る。

が、敵は正確なこちらの位置を捉えておらず、殆どが見当違いの位置に刺さった。

「雪蓮さん、直ぐに下がりました！」

「了解！ 全員後退！」

城壁から十分離れ、突入に備えて隊列を整える。

予定では、既に思春さんと明命ちゃんが城内に侵入している。

急がないと作戦開始に遅れてしまう。

突入部隊が間に合わないなど、以っての外だ。

「孫策様！ 城で火の手が上がりました！」

城から二力所、煙りと火の明かりが見える。

「やった！」

「よし、全軍突撃！ 城門をぶち破るわよ！」

城壁からの攻撃が乱れる。その隙をつき、城門まで一気に近づく。

城壁に展開していた敵部隊は、左右に展開している祭さんと冥琳さんの部隊が片付ける。

「城門が開くぞ！」

城門が開門される。思春さんが明命ちゃんが開けてくれたのだろう。

「後方から所属不明部隊接近！」

伏兵！？ そんな筈は…。周りには諸候の軍だって展開して…

諸候の軍……そうか！

曹操軍。

「寡兵と思っていたけど、やってくれるわね。」

孫策。たったあれだけの兵力で参戦した時は、漁夫の利を狙っているものだと思っていたけど…。

まさか、戦端を開いて城に一番乗りするとは…。

「悪いけど、私達も混ぜて貰うわ。春蘭！ 騎馬隊を率いて突撃しなさい！」

「了解です！」

さて、後は張角を……めれば……。

これは、賭け。

大きな危険が伴うけど、上手くいけば得るものはある。

今後訪れるであろう乱世において、絶対に力になる。

「旗印は……曹！ 曹操軍です！」

やっぱり……。

「利に目敏いわね。悪いけど、大賢良師の首は私達が貰うわ。」

「ですね。急ぎましょう！」

でも、いくら敵が浮足立っているとはいえ……数では黄巾党が圧倒的だ。

警戒は怠ってはいけないな。

「でも、大賢良師は一体何処に？」

「普通に考えれば、大将旗の掲げられている所ね。」

「暗くて良くわかりませんね…」

「ともかく、砦の中心を目指して進めば見付かるわよ。」

となると、これだけの兵力では心許ないよな…

「甘寧隊、合流します！」

「周泰隊も合流しました！」

兵士が報告する。

「戦力も整ったわね。全軍突撃！」

「「おおおおおー！！！！！！」」

雪蓮さんの言葉に応えるように、みんなが雄叫びを上げる。

「殺せ殺せい！ 賊を人と思うなよ！ 餓えた獣を狩り尽くせい！」

祭さんが物騒な事を言っている

確かに盗賊は糞以下だけど

「甘寧隊、突撃する！」

甘寧さんが部隊を率いて雪蓮さんの前に出る

正直ありがたい。雪蓮さんは前に出過ぎていた。

「周泰隊は、本隊の援護をします！」

明命ちゃんはこちらを補佐をしてくれるようだ。

更に、曹操以外の諸侯の軍が動き始めたようだ

既に城の周辺は包囲されており、逃げようとする黄巾党は彼等によつて殲滅されている

いい気味だ…

そうして、黄巾党は数を減らしていった

城内。

「天和姉さん、急いで！」

「待つてよ、ちーちゃん〜！」

「姉さん声大きい！ 見付かったらどうするの！」

「ちい姉さんめ十分声大きいから。本当に見付かるわ」

残念だけど…

「もう見付かってるわよ?」

「だっ…誰!？」

桃色の髪の少女が驚きの声を上げた

「騒ぐようなら喋れなくするわよ?」

「っ!？」

三人が後ずさった

「そんなあからさまに……ちょっとした冗談よ」

「……………」

眼鏡をかけた少女が前に出る

「私達に何の用?」

「それは、自分達が一番解っているんじゃない?」

後ろの二人が怯えて、身を寄せ合う

「冗談よ」

「っ……あんだねえ!」

「黙りなさい」

少し殺気立った声を出す

「ひう……！」

「本題に入るわ。私は曹操、私の目的は……」

第八話

黄巾党との決戦からいくらか時が過ぎた

決戦において、城への一番乗りや、多くの功績を上げた雪蓮さんの
勇名は大陸全土に広がった。

更に、雪蓮さんは“江東の麒麟児”という異名まで付いた。

カッコイイなあ…

僕も戦場で名を上げたら、カッコイイ異名が貰えるのかな…

おほん…！

また、雪蓮さんの下に志願兵も多く集まって来ている

それと共に、有力者たちの援助が入り、僕等の軍勢はその規模、質
を大きくしていった。

雪蓮の館、中庭。

この間の黄巾党との決戦…。

その直前に出会った……という表現は正しいかは解らないが……あ

の少年、長門…。

正直、雪蓮様が何故あの少年を麾下に加えたのか…？

特別、頭が良い訳でもなければ腕が立つ訳でもない。

才能はあると思うが、雪蓮様の近衛をするほどでは…

「やはり、雪蓮様に聞くのが一番か…」

「私に何を聞くって？」

後ろから突然声をかけられる。

「雪蓮様！？」

まさか…この私が、ここまで接近されて気付かないとは…

「何をそんなに慌てているのよ、思春？」

「い、いえ…別に…」

私もまだまだ修行が足りないということか…

「あの、雪蓮様に一つお伺いしたい事が…」

廊下。

「え？ 僕が雪蓮さんと出会った時の経緯ですか？」

「そう。出来れば教えて欲しいのよ。」

すれ違った蓮華さんに呼び止められ、あの時の事を聞かれた。

「わかりました。では…」

今から三年前ぐらい前の事です。

僕は、川辺の小さな村に両親と住んでいました。

川の近くという事で、当然両親は漁師でした。

ある雨の日の事です。

強い雨で、両親も村の人も漁に出ず家にいました。

だから、気付かなかった…

僕の家には、村の人の一人が駆け込んで来ました。

「こ、江賊だ！ そこら中にうじゃうじゃいる！」

急いで外に出てみると、武器を持った男が何人も暴れているのが見えました。

「最近、また活動を再開した錦帆賊だ！」

「長門は隠れている！」

父さんに言われて、僕は急いで床下に隠れました。

と同時に、賊がこっちに近付いてきて…

その後の事はよく解らないんですけど…

気付いたら、両親は倒れていて… 賊もみんな死んでいて… 雪蓮さんがいて…

だから、多分雪蓮さんが賊を倒して僕を助けてくれたんですよ

雪蓮さんは僕の両親を救えなかったと謝ってましたけど…

そして、帰る所の無くなった僕は雪蓮さんに引き取られた訳です。

「こんな感じですね…」

「そうだったの……ごめんなさい、気軽に聞いて良い内容じゃなかったわ。」

蓮華さんが申し訳なさそうに言った。

「いえいえ、僕は気にしてないですから。」

中庭。

「私が村に着いた時には賊はみんな死んでいたわ。」

「馬鹿な……では、誰が賊を？」

「長門よ」

「それこそ馬鹿な話です。その時のあやつはまだ……いや、今でも十分そうかも知れませんが子供ですよ？」

「だけどね、腹を何かで引き裂かれた賊の死体と、頭のとっぺんから爪先まで血に染まった子供……それを見て、長門以外、誰が賊をやったと考えるのよ？」

確かに……状況的にはそうかもしれない……

「でも、長門はそれを忘れているのよ。」

「それは……また不思議な……」

「もしかしたら、本当に長門以外の者が賊を倒したのかも知れないけどね……」

「……真実は誰にも解らない……という事ですか……」

「そもそも、賊は死体を数えると百人はいたのよ。長門は百人も同時に相手を出来る程強く無いわ。」

「それを聞くと、やはり別の者が……」

「でも、状況だけ見たら長門以外はありえないのよ。」

……つまり、あいつにはとんでもない潜在能力が隠されているのかも知れないと

「だから貴方は賊嫌いなのね…」

「はい…。」

今でも忘れない…あの時の江賊の事……名前は…“錦帆賊”

「あら……姉様と思春？」

「本当だ。」

何か話をしているようだけど…

「珍しい組み合わせね……何を話しているのかしら？」

珍しい組み合わせというか……思春さんは基本的に蓮華さんに付きまと……護衛をしているから…

僕と蓮華さんは二人の会話を聞き取る為に近付く

「しかし……江賊ですか……」

「思春には、ちょっと耳の痛い話だったわね」

… どういう意味だろ？

「“元”江賊だものね」

「なっ！？　そう…だったのか……」

「長門……。… そういえば… 思春のいた江賊の名前……。… つ！？」

蓮華さんがぶつぶつと独り言を言って、何かに気付いた顔をする

「錦帆賊……。… そう名乗っていた時代もありましたね……」

錦帆賊……。… ！？

今確かに…

「思春さんが… 錦帆賊？」

「な… 長門？　落ち着いて聞いて頂戴。三年前なら思春は既に……」

蓮華さんが何か言っているが僕の耳には届かない

「思春さんが……。… 父さんと母さんの……」

「違うの長門!!」

「長門？」

蓮華さんの声に、雪蓮さんと思春さんが僕達に気付いた。

「……っ！」

思春さんと目が合う

その瞬間、僕は思春さんに向かって走り出した

「っああああ!!」

「長門！ 姉様！ 長門を止めて！」

「任せなさい！」

甘寧に飛び掛かる寸前で雪蓮さんに捕まれた

「放して下さい！ そいつは父さんと母さんの！」

「落ち着きなさい長門！ 蓮華！ 何があつたの!？」

「話すと長くなるので簡単に言います。長門は思春が両親の仇だと勘違いしたようで…」

「私が…」

第八話（後書き）

書きたい物が出来てしまいました。

更新を無期限で延期させていただきました。

申し訳ありません…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0404v/>

真・恋姫†無双～継承された外史～

2011年10月7日15時25分発行